

# 先導的な乳幼児教育の実践に関する一考察

—先導的な幼稚園や保育所の視察を通して—

## A Study on the Practice of Leading Infant Education

—Visiting Pioneering Kindergartens and Nursery Schools

矢野 正・前田 綾子

Tadashi YANO, Ayako MAEDA

### 要旨 (Abstract)

本研究では、2017年の幼保3法令の改定を受けて、乳幼児教育がまず目指すものについて整理し、その後の小学校への接続を見据えながら、先導的な園を視察・訪問をし、その知見を整理してまとめることを、主な目的とした。そこから、保育の指導法研究の現在と課題を洗い出しなおすことに挑戦し、今後、保育・教育界で進めていくべき研究課題をあらためて探究したものである。その結果、子どもの遊びと生活の指導法に分けて、課題研究を進めていくことの方向性の示唆を得ることができたものとする。幼児教育無償化が始まった2019年の今後については、ますます乳幼児教育からの強い発信が期待される。

キーワード：保育の指導法、先導的な乳幼児教育、保幼小の接続・連携

### I. 研究の背景と目的

幼稚園、保育所、認定こども園でいう「幼児教育」とはそれらに共通に行う教育面に注目して、総称することとしたのであり、同時に、それは実質的に幼稚園などの幼児期の学校教育と実質的に同じことである。いずれも、組織的に計画的に保育あるいは教育を進めるものである。その枠組みを明確に示したものが、平成29年の3法令の改訂（改定）であるといえよう<sup>1) 2) 3)</sup>。

さて、小学校の始まりは、小学校の学習指導要領によると、二つのことを踏まえる必要がある。一つは、乳幼児期に育っている資質・能力を生かし、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を生かした指導を行うことであり、それは具体的には生活科と他の教科等のつながりを図ることなどにより、実現していくものである。もう一つは特に1年生のはじめにはスタート・カリキュラムを実施し、そこで、乳幼児に育った資質・能力、具体的には幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の発揮と、それを生活科と他の教科等の合科・関連的指導を行うことである。生活科で育成しようとする資質・能力は実は幼児教育と同様であり、その点でも生活科が幼児教育を小学校教育へと導く際の要に位置することが分かる。小・中学校全体の学習指導要領での資質・能力の規定は幼児教育と連続しているが、より構造的なものとして示されているといえる。

そこで、スタート・カリキュラムで行うべきことは大まかに言うと、次の5つに整理できる。第一は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を子どもが安心して発揮できるように、幼児教育に類した環境や時間設定で丁寧に授業を始めることである。たとえば、必ずしも45分授業とか、一人ずつ机に着席することにこだわらなくてもよいだろう。第二は、1年の始めに行う適応指導を子どもと相談しながら少しずつ行うことである。様々な背景のある幼保から来れば余計に子どもが持ち込む生活の仕方や様式は小学校と違うので、その納得こそが重要になる。第三は、教科の始まりを乳幼児期からのその事柄への関心や感覚、学びの芽生えを教科の始まりであり、基盤とすることである。第四に

は、様々な園から子どもが来て、個人差も大きいので、それを観察及び記録により見定め、その後の対応について見直しを立てておくことである。第五は、保幼小の教員の交流・連携研修と意図的な異動が肝要になろう。

## II. 研究の方法

筆者らは、大阪総合保育大学総合保育研究所の「保育の指導法PJ」に所属している。ここでは、先進的な幼稚園や保育園を探訪し、その園の取り組みの特徴を知ることが主な目的として取り組んだ。2018年～2019年にかけて、計3園を訪問し、参観する機会を得たので、ここに実践報告する。

## III. 結果

### 1) 学校法人J学園 J学園幼稚園 しろぐみ (2018年2月23日に参観)

- ・まず、学級だよりに3つの力(ポリシー)を具体的に書いていることに、たいへん驚きを覚えた。
- ・指導案のねらいが本当にこれでよかったのかを、PJでさらに検討するのが良いのではないかと考えられる。
- ・子どもたちに製作する「おひなさま」のイメージの共有が、しっかりとなされていた。
- ・保育雑誌もうまく利用できればいいのではないか。しかしその一方、いらないと考えられる情報もいっぱいある。
- ・子どもの心の動きを、ねらいの中心に置くとよい。
- ・小生の小学校教員の経験からすると本日の内容は、低学年の生活科や中学年の図工科に匹敵するのではないか。子どもたちはこだわりや関心をもって、細かな作業までしていた。
- ・幼稚園の標準的な主活動までの道筋を参観できた気がする。朝の会から製作まで含めてとても感心した。
- ・学びあいや集団の力が感じられた。クラス経営がうまくいっていると思料される。
- ・手を挙げてもらえない子どもがいた。そこでは、1人担任の難しさがある。
- ・終わりの時間を先に示さずに活動をしていた。小学校ではチャイムがある。
- ・先生の「1」のところまでの提案に、子どもたちは「2」のところまでとさらに時間の要求をしていた。
- ・子どもたちの集中力が何より素晴らしいと感じた。熱中・入り込む保育がしっかりと展開されていた。
- ・製作のわりに保育時間中は静かに推移していたと感じる。もっとざわつきの中で保育が行われると思っていた。
- ・部外者にも「見て、見て」と気軽に話しかけてくる姿がいくつもあった。
- ・保育活動は、大変ほほえましかった。

### 2) 社会福祉法人 S福祉会 K保育園 (2018年6月6日に参観)

- ・園の子どもたちの、人や他者に前向きなこと(人間関係力)に率直に、驚きを感じた。
- ・子どもたちは人懐っこくて、参観した筆者がもて遊ばれていた。1歳クラスのツネヨシくと気が合ったかもしれない。
- ・多くの子どもが参観者への興味が強く、ボタン、腕時計、バックなどに関心があったようである。
- ・子どもの笑顔が、天使のように感じられた。
- ・園での生活を、子どもたちみんなが快く感じているようであった。
- ・さくらんぼ組では、子どもの環境構成が見事であった。さりげない一輪差し。立って見える新しい視野や自分の足を動かして確かめる姿、興味をもって人を見るまなざしなど、子どもの成長を感じられる様子であった。
- ・午前9:45から、体操時間にエビカニクス、その後園内をお散歩をして回っていた。

- ・乳児さんのお部屋には、手作り感のある素晴らしい園具・素材。とても楽しそうに遊んでいた。
- ・絵本を読んでもらっていた。自分でもいないいないばあ。はずかしそうにする姿がほほえましかった。
- ・れもん組はリトミック・運動音楽遊び、ぶどう組は遊戯とメロン室でブロック創作遊び、りんご組は洗濯ばさみで活動を行っていた。それぞれの年齢での遊びの違いが見て取れた。
- ・保育園の標準的な午前中の保育の道筋を参観できた気がする。
- ・今回は特に、保育・生活の質の高さに感心した。
- ・保育者がいい意味で目立っていない。チームでの保育が普段から連携ができているのだろうと思料される。月案を作る際には、保育者の介入がカギとなるだろう。
- ・子どもたちは大人に負けないくさんの量を食べていた。食べながら寝てしまう子も・・・。
- ・保護者と一緒に子育てをしている雰囲気伝わってきて良かった。掲示などの工夫も参考となる。
- ・部外者にも「見て、見て」と気軽に話しかけてくる、上にはい登ってくる姿がいくつもあった。
- ・参観中は、大変ほほえましかった。

### 3) 社会福祉法人R会 Lこども園 1歳児ももグループ (2019年2月28日に参観)

- ・当日は、雨模様だったので、保育の計画と実際がやや違っていた。
- ・指導案のねらいがこれでよかったのかを、改めてPJ等で検討するのが良いと考えられる。
- ・子どもたちは一様ではなく、ブロックなどそれぞれに遊びこんでいる。おもちゃが多彩であった。
- ・絵本「けんけんぱ、しろいかみ、おととつと、たたんばたたんば」の内容をよく覚えている。読んでほしいと、次々に持ってくる姿が認められた。
- ・子どもの心の動きを、保育のねらいの中心に置くとよいのではないか。
- ・ちょうどよい棚を「かくれんぼ」に使って遊んでいる。
- ・どうぞ、はい、ありがとう。等のコミュニケーションがすでに始まっている。先生に、バイバイと手を振る。
- ・積み木を新幹線に見立てる力がある。ごっこあそびでは「サンドイッチ」を作っている。
- ・コップでじゃ口からお水を出している。
- ・クラス担任は、奈良学園大学文化女子短大の卒業生であった。
- ・言葉のやりとりで遊ぶ様子が見られた。
- ・部外者にも体を預けたり、寄せたりする姿がいくつもあった。
- ・保育では、A+B→Xになる。
- ・先生が遊びをリードする。「車で遊ぼう」や、例えば「おじさんに朝ご飯もらっておいで」「行っといで」というと、徒党を組んで遊ぶ姿がある。
- ・保育活動は、終始大変ほほえましかった。

## IV. 考 察

今回の3園の参観や訪問を通して、保育の指導法とは一様でないからこそ、きちんとした方法論を持って保育に取り組む必要性が示唆されたといえる。

園ではそれぞれに指導計画を立てており、それらを今回は事前に得て、保育活動を参観することができた。

そこで、保育の指導法研究のためには、目的・仮説・方法を明確にする必要があると考える。しかしながら、これま

での保育界の常識では、その方向性はあっても、具体的な目的・仮説・方法を示してこなかったというくらいがある。そこでは、目的は従来からあるような「保育の質」の改善に、保育の指導法・具体的な保育場面の編成・構想とその適切な実践が必要であることを確認することができたように推察される。何より、質的な改善は、保育の指導法の要であり、「保育者と子どもの出会い」によって決定されると考える。

この素敵な大切な出会いによって、保育というものが多様な展開や実践の変貌を遂げると考えられる。子どもがリードする出会いもちろんあれば、保育者がリードする場合もあるが、双方の働きかけあいや出会いの本質が保育の質を決めることになるだろう。つまり、保育者と子どものどのような出会いが適切であるかを明らかにすることが、保育の指導法研究の究極の目的と言えるのである。

特に、今回の3園に共通した重要な視点となっているものは「出会いの有用性」である。保育者がどれだけ熱心であろうが、どれだけ子どもに寄り添いかかわりあえるように願っていても、そこに適切な出会いがなければ保育指導がうまくいったと結論付けることはできない。その保育が適切であるとは、簡単には判断できないのである。

そこでは、多様な保育形態があろうが、いずれにしても保育者の働きかけが子どもの活動と対応していなければ意味のないものになる。ではどのように対応するとよいのか、どのように理解すればよいのであろうか。今後も考えていきたいテーマである。

## V. おわりに

最後に、新たな指導法研究の提案をしたい。以上のように事例から検討を深めていくとき、当面の研究課題としては、次のことが出発点になるのではないだろうかと考えられる。

- 1) 保育者と子どもの出会い (deai) とアイデア (idea) が、どのようになされているのかを丁寧にみることを、最初の土台にする。出会いの中で2つの融合がどのようになされたのか、(またはなされなかったのか、) その主たる原因は何であろうかと考える。
- 2) 出会いの中で指導の段階として、起承転結の4つのステップ(段階)をどのように踏んでいる保育活動であったかどうかを考える。
- 3) 以上の統合保育では、遊び活動の指導と生活活動の指導において、各々の前提条件があると仮定すると、遊びと生活において働いている理論やベクトルは同じではないと考えられる。例えば、保育のねらいを考えるときに、生活の場合は生活技能の習得という具体的な目標が必要であるのに対して、遊びの場合には具体的な目標が前面に出てくるというわけではないのであり、保育の指導法として混同しないほうが良いものと考えられる。子どもの遊びと生活に分けて、論理や仕組みを整理していく必要があるだろう。
- 4) また可能な限りにおいて、事前・事後の保育者への聞き取りを行うとともに、可能であれば保育の振り返りを口頭及び文書で収集するとよいと考える。そのポイントは、事前にはどのような保育を狙っているかであり、事後では保育の振り返りであろう。

謝辞 大阪総合保育大学総合保育研究所「保育の指導法PJ」の研究仲間の皆さんや、参観させていただいた各園の関係者の皆様に対しまして、心より御礼申し上げます。

利益相反 本研究において、開示すべき利益相反はない。

## 文 献 (References)

- 1) 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』 フレーベル館
- 2) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- 4) 玉置哲淳 (2019) 「保育の指導法PJ」レジュメ
- 5) 現代保育問題研究会 (2018) 「現代保育内容研究シリーズ1 現代保育論」一藝社